沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），№. 14, pp. 63-79. 2021

映画「琉球の風物」に関する一考察　～空手関連を中心として～

崎原恭子[1)]

Consideration of about the movie “Ryukyu no Fubutsu”
(The Scenery of Ryukyu) ; focus of Karate

Kyoko SAKIHARA[1)]

はじめに

近代の沖縄を記録した映像としてよく知られている、「琉球の民藝」及び「琉球の風物」という２つの映画がある。いずれも柳宗悦（1889-1961）を主宰とする日本民藝協会によって企画され、1940年８月に公開された。

本稿では、この内「琉球の風物」について調査・研究したことを紹介したい。特に、「琉球の風物」の終盤に収録された空手の映像と、公益財団法人松竹大谷図書館に所蔵されている「琉球の風物」の台本に関する考察を報告することを目的とする。

なお、本稿では「唐手」または「空手」という表記を特に区別はしないが、鉤括弧でくくった引用文や言葉については、原典の表記を用いている。また、戦前の雑誌や新聞記事からの引用文の文言は、基本的に現代仮名遣いに置き換えることとする。

１．映画「琉球の風物」とは

（１）概要

映画「琉球の風物」は、1940年に制作され、同年８月22日に公開された。企画は日本民藝協会、提供は日本短篇映画社、制作会社は大日本文化映画製作所である。本映画の内容として、『月刊文化沖縄』には「琉球の風物を造形美術の立場から、或いは演劇舞踊の側から紹介し、南国的な市場風景驚異的な唐手術を通じて、琉球の人々の精神生活を現代的な立場に於て地文的に史的に説いたものである。」と掲載されている（注１）。

（２）日本民藝協会の第３回沖縄調査

柳宗悦を主宰とする日本民藝協会は、1939年３月以降、沖縄調査を行った。特に1940年１月に実施された第３回調査では、日本民藝協会の同人に加え、観光や文学等の様々な分野の人々が参加した（注２）。この調査では、映像を撮影し、その素材に基づいた映画を制作することが目的の一つとなっていた。

1940年３月に刊行された『月刊民藝』では、この第３回調査の詳細が報告されており、那覇に上陸した１月３日から「ひととおり沖縄の景色・建物・工芸・芝居・音楽・料理・風俗などに接し得た」（注３）とし、１月７日午後３時から観光を主とした座談会が開かれたが、この席で沖縄県側と標準語問題の論争が起こったことが記されている（注４）。

（３）細谷辰雄と猪飼助太郎

第３回調査には、２人の映画関係者が参加していた。現在も日本映画界大手である松竹株式会社の社員で、計画課長の細谷辰雄とカメラマンの猪飼助太郎である。第３回調査に参加した写真家・坂本万七（1900-1974）が写した写真の中に、映像撮影風景をとらえた写真がいくつか残されている。『坂本万七遺作写真集　沖縄・昭和10年代』（以下、「写真集」という。）には「撮影を見物する生徒」というタイトルの写真が１枚掲載されている。場所は首里にあった沖縄県立師範学校の校庭と思われるところである。後方に生徒達がずらりと並び、その手前に地面に三脚を大きく広げて設置されたカメラのファインダーをのぞく猪飼と、そのさらに手前に

1) 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006　沖縄県那覇市おもろまち３-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

しゃがむ細谷とみられる人物が写っている。彼らの視線の先にあった被写体は「写真集」には載っていない。ただし、後述するが、「写真集」未掲載の写真に、この被写体と撮影風景をとらえた写真が数枚残されていた。

なお、「写真集」に掲載された多くの写真は、１つのページの上下段に１枚ずつ配置されている。「撮影を見物する生徒」は下段にあり、その上段には「空手教練」というタイトルのついた写真がある。ここには、33人の人物が５列に分かれて並び、集団で空手を演武している様子が写っている。「琉球の風物」にもこの様子が収録されており、沖縄空手の剛柔流系統で鍛錬されているセイエンチン（セイユンチンともいう）の型だとわかる。「撮影を見物する生徒」の写真に空手の演武は写っていないが、「空手教練」以外の「写真集」未掲載写真とあわせると、一連の写真であることが明らかとなる。

２.「唐手術」の調査と撮影

（1）写真

坂本が師範学校で撮影した空手関連の写真は、「写真集」に２枚、未掲載で９枚の合計11枚ある。内訳は以下のとおりである[注5]。

＜掲載＞
写真Ａ：空手教練
※セイエンチン（セイユンチン）の集団演武
写真Ｂ：撮影を見学する生徒
＜未掲載＞
写真Ｃ：映像撮影風景
写真Ｄ：クルルンファー①
写真Ｅ：クルルンファー②
写真Ｆ：テンショウ
写真Ｇ：サンチン①
写真Ｈ：サンチン②
写真Ｉ：サンチン③
写真Ｊ：タンを用いた鍛錬
写真Ｋ：型の分解

写真Ａは先述したとおり、剛柔流のセイエンチン（セイユンチン）の型を集団演武している写真である。少し離れた高台から引いて撮影したもので、号令者なのか、演武者達と対面に空手着を着用した人物が１人立っている。写真Ｂも先述したとおりの写真である。

写真Ｃは、中央にカメラをのぞく猪飼とその左隣に細谷と思われる人物が腕組みをして猪飼の撮影をみている姿を、下方から見上げる構図で撮影された写真である。細谷の左前には、脱いだ帽子を後ろに持った柳宗悦が立ち、カメラの先に視線を向けている。また、猪飼の右前には、空手着を着用し、手に畳まれた紙を持った宮城長順（1888-1953）が写っている。宮城は、沖縄空手の剛柔流流祖であり、1940年当時は師範学校や那覇市立商業学校で空手教師として活躍していた人物である[注6]。猪飼のカメラがやや下向きになっていること、坂本の写真が見上げた構図になっていることから、高台で撮影している風景で、写真Ａの集団演武の映像を撮影していた様子をとらえた一枚と思われる。なお、写真Ｂの右奥に、盛り上がって高くなっている場所がみえる。この付近にカメラを設置し、校庭を俯瞰できる場所で撮影したと考えられる。

写真Ｄ・Ｅ・Ｆは１人の生徒が空手を演武している写真である。写真ＤとＥは剛柔流のクルルンファーという型の一部である[注7]。「琉球の風物」にもその一部が収録されており、写真と同一人物による演武である。また、写真Ｆは同じく剛柔流の型であるテンショウの一部で、クルルンファーと同じ生徒が演武しており、映画･写真とも共通している。背景から、撮影場所は写真Ａの写真で集団演武されていたところと同じ場所と考えられる。

写真Ｇ・Ｈ・Ｉは、剛柔流のサンチン（締め）をとらえた写真である。写真ＧとＨは、中央にサンチンを演武する生徒がいて、その後方にいるのが宮城である。写真手前の向って左側に少し写っているのが細谷、右側にカメラと一緒に写っているのが猪飼であり、坂本が２人の間の後方からシャッターを切った構図となっている。サンチンを演武しているのは当時師範学校生だった古浜興太郎である[注8]。写真Ｉは、古浜と宮城を近くから撮影した写真であり、宮城が古浜のサンチンの習得度合いや身体の発達具合を確かめている様子がわかる。

写真Ｊは、剛柔流の鍛錬器具の一つであるタンを用いている生徒の写真である。

写真Kは、型の分解を写した写真で、写真D・Eと同じ人物が分解をしていること等から、クルルンファーの分解の一部分と思われる[注9]。

これらを合わせて考えると、写真Bは校庭にカメラを設置して撮影したもので、写真GとHに写り込む細谷と猪飼の姿勢と一致することから、写真Bの被写体は、古浜と宮城によるサンチン（締め）だったと考えられる[注10]。

（2）映像

「琉球の風物」の概要にもある通り、映画本編の終盤に「唐手術」の映像が収録されている。「唐手術」とは空手のことを指すものとする。

本映画には、１分程度に編集された師範学校生による空手関連の映像が収められている。各要素は以下のとおりである。

＜映画内の要素＞

映像１：器具を用いた鍛練の様子
　　※巻藁、タン、サーシ、甕、チーシ
映像２：タンを用いた鍛錬の様子
映像３：クルルンファーの演武
映像４：テンショウの演武
映像５：セイエンチン(セイユンチン)の集団演武

上記の内、映像１～４は校庭にカメラを置いて映像を撮影し、映像５は生徒達を俯瞰する場所から撮影している。

鈴木訓治が日本民藝協会の第３回調査の主な日程を記した「琉球観光記」には、1940年１月６日（木）の行動として、「師範学校講堂で空手術を見学。」とある[注11]。その後、鈴木は首里城へ向かい、他のことを記録しているため、空手の撮影には立ち会っていなかったと思われる。撮影は恐らく同日の天気回復後、映像撮影担当の細谷と猪飼、その様子を写真撮影した坂本を中心に行われていたのだろう。なお、写真Bのみであるが、柳が写っていることから、柳も空手の撮影に同行していた可能性も考えられるが、すべての空手の映像撮影に立ち会っていたかは不明である[注12]。

３．松竹大谷図書館所蔵の台本

（1）書誌情報

東京都中央築地にある公益財団法人 松竹大谷図書館には、「琉球の風物」の台本が収蔵されている[注13]。以下に、同館のホームページで公開されている図書書誌詳細と実物資料を調査して得られた書誌情報を掲載する。

＜図書書誌詳細＞

資料区分	映像台本
書誌番号	00045637
分　　類	記録映画作品
タイトル	琉球の風物／リュウキュウノフウブツ
出版年（西暦）	1940-
内容細目	（記載なし）
著　　者	柳宗悦＋式場隆三郎（監修）、日本民藝協会（企画）
一般注記	封切年：1940年●製作：大日本文化映画製作所●日本短篇映画社提供

＜調査による書誌情報＞

寄贈者	松竹株式会社
蔵書年	昭和33年（1958年）２月10日
法　量	縦25.5cm、横18.1cm、厚さ0.15cm
頁　数	20頁（表紙・裏表紙を除く）
付属資料	『琉球の風物（梗概）』１冊

松竹大谷図書館は、松竹株式会社の創業者の一人である大谷竹次郎（1877-1969）が1955年に文化勲章を受章したことを記念して、翌年の1956年に設立された。演劇と映画の専門図書館で、長年にわたり演劇や映画事業に携わった松竹株式会社が収集・保管してきた史料を所蔵している。同館に「琉球の風物」の台本が収蔵された1958年は、松竹株式会社から資料が一括して収蔵された時期に当たる[注14]。なお、付属資料の梗概には収蔵年が記されていなかったが、表紙や見返しの右上にある紫色の枠印に記された番号表記が共通しているため、同時期に収蔵されたと思われる。この梗概に掲載された文章は、台本に記載されているものより少し長い[注15]。

なお、この台本の著作権について、映像の撮影及び編集者として掲載される猪飼に関する情報が不明なため、実物資料の写真撮影及び複写は禁止となっている。そのため、実物資料の調査では、台本の記載事項等のメモを作成した。

（2）台本の内容構成

台本の構成を大きく分けると、表紙・中表紙・本文・裏表紙となる。台本の記載事項は、映画の内容と対照できるようまとめた別表に記載しているので参照してほしい。

表紙には、中央に縦長の二重枠線とその中の「全」「巻」、左横の「松竹株式会社」の文字が黒色印刷されている。松竹株式会社で使用していた台本の様式と思われる。二重枠線には映画のタイトル「琉球の風物」と「一」が手書きされ、あわせて「琉球の風物　全一巻」となる。その他、二重枠線の右横に一重枠線で囲まれた「原本」と、一重カッコ内に「カット５ヶ所」という、いずれも赤鉛筆で手書きされた文字が書かれている。見返しには図書館の蔵書印等がある。中表紙からはガリ版刷りで、文字や記号が記されている。中表紙の裏に梗概が記され、次のページから本文が始まる。本文に記載された要素を上から順に記すと、最上部にページ数があり、次に映画の冒頭に載せる文字（テロップ）や解説の番号・記号、次に記載文字と解説（ナレーション）がある。その下に横線が引かれ、最下部にバックミュージックや歌詞、字幕スーパーの文字が記されている。

（3）削除された解説

台本に記載されたテロップや解説は、映画本編とほとんど変わらなかった。しかし、台本には赤鉛筆で大きく削除され、映画本編に反映されていない部分があった。

＜赤鉛筆で削除された解説＞

削除１：１－３ページ、解説番号２内
　此処は本州最南端の亜熱帯地方

削除２：１－４ページ、解説番号４内
　本邦の

削除３：１－５ページ、解説番号７内
　早くより本土の文化と

削除４：１－６ページ、解説番号８内
　何処かそこには大和風の感覚が　大和民族と源を同じくする

削除５－１：１－15～16ページ、解説番号16内
　日本古来の武夫（もののふ）の心を保持しているものと言わなければならぬ

削除５－２：１－16ページ、解説番号17
　此の古格ある武道は　今　体育に生かされて若い学徒の肉体と精神を燃やし続けている　故あるかな　此処に聖戦四年　沖縄県琉球からは幾多の戦士が応召して　大陸の戦野に皇国の武威を示しているのだ

削除６：１－17ページ、解説番号18内
　本州より遥か南に突き出て　支那或いは諸外国の抵抗を強く受け乍ら然も日本の古格をよく保ち続けて来た琉球

削除された文章や前後の文脈について別表を参照に見ると、削除された部分のどれもが琉球・沖縄と日本との関係や繋がりを強調するものであることに気づく。特に、台本の中で空手の解説は、解説番号16と17の２つで構成されているが、この内、解説番号17の部分が丸ごと削除されていた。

（4）削除された解説の検証～空手を中心に～

削除５－２の文章には、いくつか注目すべき文言がある。まずは、前段の「体育に生かされて　若い学徒の肉体と精神を燃やし続けている」である。1905年２月の『琉球新報』に、前年から中学校で「唐手」を指導するための稽古が始められていた、という記事が掲載された[注16]。中学校で指導が始まり、結果として県内に空手が広がることとなった。空手の広がりに深く関わる資料として、1908年10月付けで、沖縄空手の大家の一人である糸洲安恒（1831-1915）が、空手の効能や小学校から空手を学ぶ意義等を記した、いわゆる「唐手十ヶ条」が知られている。「唐手十ヶ条」は、1938年に発行された『空手道大観』の巻頭グラビアに、花城長茂（1869-1945）所蔵として写真が掲載されている[注17]。要約すると、多くの効能を備えた空手を中学校や師範学校の生徒が練習し、将来教師となって小学校で精密に教えることによって空手が全国へ広が

り、沖縄県民だけでなく、軍人社会の一助となる、ひいては国のためにも大いに役立つ、ということが説明されている。

1938年の『琉球新報』に、政府が空手を全国の青少年に奨励することが決定された、という記事が掲載されている(注18)。沖縄を発祥の地とする空手が、国をあげて広まる一助となったと考えられる。この記事の中に、空手を青少年に奨励する目的として、「長期戦に備えるため、青少年の健康増進に力を注いでいる」とある。この「長期戦」という言葉は次の注目点に繋がる。

削除５－２の注目点として、次に「此処に聖戦四年」の文言を取り上げる。これは、1937年に勃発し、1940年当時４年目に突入した日中戦争のことを指している。この文言には続けて、「沖縄県琉球からは幾多の戦士が応召して　大陸の戦野に皇国の武威を示しているのだ」とあり、日中戦争と空手を繋げる文章になっている。これを彷彿とさせる資料は、仲宗根源和（1895-1978）によって著された書籍にある。仲宗根は沖縄県本部町出身で、県立中学校や師範学校を卒業後、特に1930年代半ば頃から空手に関する出版物を多く著し、1937年の沖縄の空手界における統一組織設立にも尽力した、沖縄の空手史上、不可欠な人物である。1938年に刊行された『武道極意物語』は、空手も含めて剣術等の様々な逸話が集録されたものである。これ以後も、序文やタイトルを『武道物語』と少々変えながら何度か出版された。この中に、糸洲安恒の逸話や「唐手十ヶ条」を一部抜粋して掲載されている部分がある(注19)。これらの最後には、「この度の日支事変で、南京攻略の際に沖縄県国頭郡出身の湧川伍長が、空手を以て敵兵数人を完全にやっつけた武勇談は、糸洲翁の遺訓を文字通り実現して義勇公に奉じた好適例と云う可きである。」とある。「琉球の風物」の台本に記された文言の元ネタにもなりそうな文章である。なお、「湧川伍長」の名前は出てきていないが、日中戦争で空手を使って活躍した沖縄出身者に関する新聞記事もみつかっている。日中戦争と沖縄と空手とが結び付けられた一例と言える。

ちなみに、解説番号16から18の文中で、削除５－１・２から削除６までの連続した文章が大きく削除されていた。映画本編の解説を注意しながらきくと、不自然な文章となっていることに気づく。

具体的には次のようになる。

＜解説番号16＞

「（前略）その火の出る様な鍛錬ぶりと素朴なそしてウツボツたる覇気は」（以後、削除５－１）

＜解説番号17＞（削除５－２）

＜解説番号18＞（削除６）

「一千年の文化史を秘めて　琉球は今も強く素朴に生き抜きつつある」

空手の解説から一転、映画を締めくくる文章となり、文意が連結していないことがわかる。

（５）台本の性格

削除された文言の意図を探るため、次にこの台本の現状を観察し、書き込み等の経緯を考えたい。

台本のベースとなる要素は、ガリ版刷りの文字や線である。それ以外に、黒鉛筆の書き込みや赤ペン、黒ペン、全ページにわたって半分程度の面積が水濡れした痕跡、申請前一字や二字訂正の押印等がある。先述した削除１～６は赤鉛筆で削除線が引かれており、単なる文字の訂正は黒ペンで記されていた。黒ペンの文字は、台本上部に「申請前〇字訂正」もしくは「申請前〇字加入」の押印があり、〇の部分に該当ページ内の文字数「一」もしくは「二」の字が黒ペンで反映されていた。ペンで書かれた文字等の重なり具合やペンのにじみ具合、大きく削除された文章等の要素から、書き込み等の前後関係を想定した。水濡れ前のペンで書かれた文字にはにじみがあり、また、空手関係の部分の解説番号17では、黒ペンで文字を２つ訂正した上で、さらに文章全体削除されたところもあった。なお、「申請前」の「文字訂正」や「文字加入」の押印は、当時検閲という、警察等による出版物や演劇等の事前チェックに関連する。「琉球の風物」の頃は、検閲がすでに実施されていたので、検閲に申請する前の台本ということがわかる。訂正カ所も多いため、この台本はあくまでも下書きで、これをもとに最終台本が製作された可能性が高いと考えられる。

以上のことを踏まえて、削除された解説について考えたい。

この台本の解説を制作した人物は、台本には明記されていないが、映画制作者が作成に関わると考え

られる。本映画の編集は猪飼が手掛けているが、猪飼が元原稿も作成した可能性もある。

一方、解説の削除については、本映画を企画した日本民藝協会側の意向があったと考えられる。日本民藝協会側としては、琉球の美術的な側面と生活文化の特色を解説・記録して公開するために本映画を制作する意図があった(注20)。そのため、「琉球の風物」の監修者である柳宗悦と式場隆三郎の意向が働き、特に本州との繋がりを強調する文言を対象に削除した可能性が高いと考えている。さらに詳細な調査が必要であるが、1940年１月の沖縄滞在中には沖縄県の標準語励行に対し、沖縄県側と意見が対立した出来事があり、新聞紙上でも大きく取り上げられたり、『月刊民藝』で特集が組まれたりもしたことから、柳らの意識が解説の削除に繋がったと思われる。

ちなみに、当時は検閲が実施されていたことを先に触れた。宜野座葉央見の指摘によると、検閲は、日本民族以外の民族意識、あるいは独立志向を刺激しかねないものは、帝国日本の安定をおびやかす危険思想とみなされる方向性があった(注21)。宜野座の報告の中に、日本映画の検閲制度に、サイレントの劇映画「琉球史劇国難」という映画で、琉球王国の独自性を却下した検閲事項が報告されている。このように、別例では琉球・沖縄の特異性の強調が検閲で削除されることがあった。そのような社会的な風潮から、当初「琉球の風物」では、琉球・沖縄と日本との強い繋がりを連想させる解説が作られたが、柳らの意向を受け、最終的には削除に至り、本編が完成した可能性も考えられる。この削除のタイミングは、すでに、最終的な映像編集が終わっていた可能性もある。筆者は、このことが、映画終盤における、空手から映画のまとめに唐突に変わった不自然な解説に表れていると考えている。

「琉球の風物」に、琉球・沖縄と日本との繋がりを強く意識した文言や文章が想定されていたこと、特に、空手と日清戦争を結びつけ、当時の国の方針や戦時色の高まりとそれに呼応させるように空手の効能を繋げる解説が創作されていたこと、それが大幅に削除された上でこの「琉球の風物」が完成されたことは、これまでほとんど知られていなかった注目すべき点である。

「琉球の風物」の解説に空手と戦争を結びつけた文章が想定されていた理由として、日本本土から来沖して取材し、本映画の解説を作成した人物が当時の風潮に忖度した可能性もあるが、沖縄側ですでに空手の普及がこのように捉えられていた状況が存在した可能性もあると考えられる。先ほど触れた仲宗根源和の『武道極意物語』関連書籍の内、1941年に序文を少し変えて発行された『武道物語』に、「日本は必ず勝つ！」と繰り返して記されている。当時の風潮を物語っている一例ではないかと思われる。また、同じく仲宗根源和は、別の書籍でも日本武道の精神と空手の結びつきの説明をしている(注22)こと等を考えると、当時の軍事的な高揚と日本化・皇民化の風潮に結び付けられた空手の普及という側面があることは見逃せず、沖縄側でも同様な雰囲気があった可能性もある。今後、さらに慎重な調査・研究が必要である。

1940年以降も日中戦争は泥沼化を免れず、1941年12月には真珠湾攻撃が決行され、日米の決定的な全面戦争が開始された。戦局はますます激しくなり、沖縄も例外ではなくなった。1944年10月には10・10空襲、1945年３月にはアメリカ軍が慶良間諸島に上陸し、４月には沖縄島に上陸して戦場と化した。悲惨で凄惨な沖縄戦を経験し、沖縄の人々は、戦後はゼロ、むしろマイナスともいえる過酷な再出発を余儀なくされた。人々の価値観は大きく転換し、戦争を否定し、反戦運動を展開した。

それに伴うように、空手と戦争を結びつける考え方も一変したと思われる。一方、アメリカ統治下におかれ、治安が不安定な中、空手の鍛錬や普及活動が再開していった。

沖縄の先人の言葉として、「空手に先手なし」等の格言が伝えられている(注23)。先に攻撃するものではなく、自分の身や大切な人を守るための術であるというような意味を含む言葉である。沖縄戦を経験してさらに、先人から受け継がれてきた格言の重みが増し、現代は「平和の武」としての空手の意義をより強く持つことができる、強調できるのではないかと思う。

本稿では空手関連を中心として、「琉球の風物」の映像や関連写真と台本の検討を行った。「琉球の風物」の台本自体、これまであまり知られていなかった資料だが、「琉球の風物」をめぐる制作過程や意

図を詳しく知ることができることに加え、当時の社会状況も浮かび上がらせる貴重な資料である。

おわりに

「琉球の風物」について、調査が足りない点も多い中、確認できた関連資料や台本をもとに検討したことを述べてきた。今後の課題として、本映画の関係者に関する著作物を収集しつつ、未確認の関連資料も含めて、さらに分析を進める必要がある。

本稿をまとめるに当たって、筆者が平成29年度から３年間在籍した沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課で実施した沖縄空手資料収集事業及び沖縄空手会館企画展事業の成果の一部を活用した。特に、空手関係学芸補助員として空手振興課に勤務し、空手関連資料を調査研究するとともに、琉球・沖縄の人物史研究に携わる仲村顕氏には、在課中多くの教示を賜った。また、「琉球の風物」の台本調査には公益財団法人 松竹大谷図書館の飯塚美沙氏、坂本万七撮影写真の掲載には公益財団法人 日本民藝館の古屋真弓氏にお世話になった。心より厚くお礼申し上げます。

注釈

注１：「文化沖縄抄」『月刊文化沖縄』第１巻第２号９月号、1940年（復刻版、2015年、不二出版）

本書には、「琉球の風物」と同時期に制作された「琉球の民藝」の内容も「琉球の民藝をその代表的なものとして、織物、焼物、をえらび特異な製作工程の中に琉球風俗と民族性を紹介し、併せて日本ならびに諸国との連係を、人文的に歴史的に説いたものである。」と掲載されている。なお、公開に先立ち、1940年７月28日に常設館旭館において試写会が催され、その後に全国の松竹系各館で配給上映されたことも記されている。

注２：日本民藝協会『月刊民藝』第２巻第３号（1940年）に掲載された沖縄訪問の目的中に、大阪商船の湖北丸に乗船して、神戸を出帆したメンバーが以下のように記されている。

民藝協会同人
- 柳宗悦（民藝館々長）
- 式場隆三郎（医学博士、評論家）
- 浅野長量（僧侶）
- 濱田庄司（陶工）
- 船木道忠（同　）
- 佐久間藤太郎（同　）
- 棟方志功（版画家）
- 鈴木繁男（漆工）
- 田中俊雄（月刊民藝編集）

販売事務
- 鈴木訓治（たくみ工藝店）
- 佐々倉健三（銀座松屋仕入部）

写真
- 坂本万七（桃源社）
- 土門　拳（国際文化振興会）
- 越　壽雄（グラフィック編集部）

映画
- 細谷辰雄（松竹計画課長）
- 猪飼助太郎（同カメラマン）

観光事業
- 水澤澄夫（国際観光局）
- 井上昇三（日本旅行協会）

その他
- 遊佐敏彦（三井報恩会社会事業課長）
- 同　夫人
- 保田與重郎（評論家）
- 濱　徳太郎（帝国美術学校講師）
- 相馬貞三（教育家）
- 宮田武義（日比谷山水棲主人）
- 鈴木宗平（医師）
- 福井右近（電機会社重役）

注３：「問題の推移」（沖縄県学務部の意見と対立す）日本民藝協会『月刊民藝』第２巻第３号、1940年

注４：「問題の推移」（沖縄県学務部の意見と対立す）日本民藝協会『月刊民藝』第２巻第３号、1940年

注５：番号及び写真集未掲載の写真のタイトルは便宜的に筆者がつけた。また、未掲載の写真の順番は、後方の壁に投影されている師範学校建物の影の伸び具合を時間の経過と判断して、撮影した順序と思われる並びとした。

注６：師範学校では、「屋部軍曹」として呼び親しまれていた屋部憲通（1886-1937）が空手を指導していたが（渡米等のため中断時期もあり）、

1937年８月27日に逝去した。その後、1937年９月11日に宮城が師範学校の空手教師（嘱託）に就任した。宮城は1929年には那覇市立商業学校、その他に警察学校でも空手を指導していた。また、1920年代後半からは関西の大学でも指導を開始する等、多方面で空手の普及に取り組んでいた。

注７：蔵元雅一氏（国際沖縄剛柔流空手道連盟総本部）の教示による。

注８：東恩納盛男『剛柔流空手道史』2001年、株式会社チャンプ　Ｐ．16に掲載。なお、古浜は、琉球政府時代に立法院議員等を務め、能書家でもあった伊良波長幸の娘婿となった（『私の戦後史』第６集、1982年、沖縄タイムス社編）。

注９：蔵元雅一氏（国際沖縄剛柔流空手道連盟総本部）の指摘による。

注10：剛柔流流祖の宮城長順は、肖像写真や記念写真、集合写真、指導写真がいくつか残されているが、映像は残っていない。猪飼によってサンチン（締め）の映像が撮影されていたことが本写真でわかるが、映画本編には収録されていない。また、現在の松竹株式会社に「琉球の風物」の編集前の映像の所在をたずねたが、所有していないとの回答だった。なお、宮城は1940年７月にラジオ「府県めぐり　沖縄の巻」に出演しているが、この音源もＮＨＫライブラリーには残されていなかった。

注11：「一月六日　雨後曇　師範学校講堂で空手術を見学。あまり真撃になる恐れがあって、仕合を禁じられていると聞いたが、全く手足の動きは物凄い。型は幾通りも見せてもらった。終って再び首里城に行く。小雨に濡れた石垣も樹木も一層美しく見えた。（後略）」

注12：本稿とは直結しないが、柳の母・勝子は、講道館創設者であり日本初のIOC委員も務めた、嘉納治五郎（1860-1938）の姉である。嘉納は大日本武徳会等を通じて空手に関心を持っていた人物の一人でもある。1922年に上京した富名腰（船越）義珍（1868-1957）との交流は有名である。また、1927年に来沖した際には宮城長順とも面会し、空手談義に花を咲かせていた（横本伊勢吉「琉球九州随伴記」『作興』1927年３月号）。

注13：仲村顕氏による教示を受けて、筆者が同図書館へ問い合わせし、実在等を確認した。

注14：松竹大谷図書館司書の飯塚美沙氏の教示による。

注15：「琉球の風物を造形美術の立場から、或いは演劇舞踊の側から紹介し、南国的な市場風景驚異的な唐手術を通じて琉球の人々の精神生活を現代的な立場に於て、地文的に史的に説明したもので、琉球音楽民謡か(<ママ>)全篇に流れている。文化的には建物、彫刻、音楽、舞踊、工芸に特異なものがあり、一千年に亘って栄えている。映画は尚昔の王府首里城の門、正殿等の美しさ、更に郷土色豊な琉球の踊りと芝居を描き、その他魚市場や織物を、紹介している。」と説明されている。

注16：「中学校職員の唐手」『琉球新報』1905年２月５日付

注17：花城長茂は、屋部憲通らとともに1890年に陸軍教導団（下士官養成学校）に入団した近代沖縄における最初の軍人の一人。退役した後、中学校で体操や兵式体操の教師を務めるとともに、生徒に空手も指導していた。

注18：仲村顕氏が確認した記事である。

注19:『武道極意物語』（1938年）には、「糸洲安恒」と「空手道の旨意」の２つの項目で空手が紹介されている。

注20：細谷辰雄「文化映画と琉球について」（日本民藝協会『月刊民藝』第２巻第３号、1940年）による。

注21：宜野座葉央見「＜研究ノート＞日本映画の検閲制度－書誌エッセー」『アジア太平洋研究センター年報』第16号、2019年、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター

注22：仲宗根源和『空手道入門』1938年、東京図書株式会社（復刻版、2017年改訂縮刷版、榕樹書林）

注23：安里安恒の語った話を富名腰義珍（松濤）が『琉球新報』に連載した「沖縄の武技」の内「沖縄の武技（下）」に、「（前略）戦闘法　昔から唐手に先手なしと受けることを教えて入れることを教えざるは、教育上青年子弟を戒めた言葉であろう。若しさなくば、今日の戦術に矛盾する訳になる。何となれば先制力と云って気を制すると云うのは戦略法で偉大の力を有するものではないか。

又先の先を制すること能はずんば後の先を制せと云うことがある。これ等は唐手で云うと、敵に先を制せられた時は受けると同時に入れ反えしをせよと云う意味になるけれども、国家存亡の場合或は父母妻子に恥辱をかけ敵が肉薄して止むを得ざる場合でなければ先手は許されない。個人と戦う時及び衆人に囲まれたる時は法等種々あ(る)が、これを一々具体的に述ぶるのは青年子弟の為に宜ろしくないから遠慮しておこう（後略)」と掲載されている。

参考文献

沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課『沖縄空手流派企画展　剛柔流流祖　宮城長順』リーフレット、2019年

沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課『沖縄空手企画展　沖縄空手と学校教育パート１　空手を伝え､広める！－近代の空手教師たち－』パンフレット、2019年

宜野座葉央見「＜研究ノート＞日本映画の検閲制度－書誌エッセー」『アジア太平洋研究センター年報』2019年

久貝典子「日本民藝協会同人の沖縄調査－昭和13年～ 15年にかけて－」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』第22号、2010年

月刊文化沖縄社『月刊文化沖縄』第１巻第２号９月号、1940年

坂本万七『坂本万七遺作写真集　沖縄・昭和10年代』1982年、新星図書出版

崎原恭子・仲村顕「空手を伝え、広める！－近代の空手教師たち－」『しまたてぃ』№91､2020年、沖縄しまたて協会

・島袋邦「仲宗根源和」『沖縄大百科事典』1983年、沖縄タイムス社

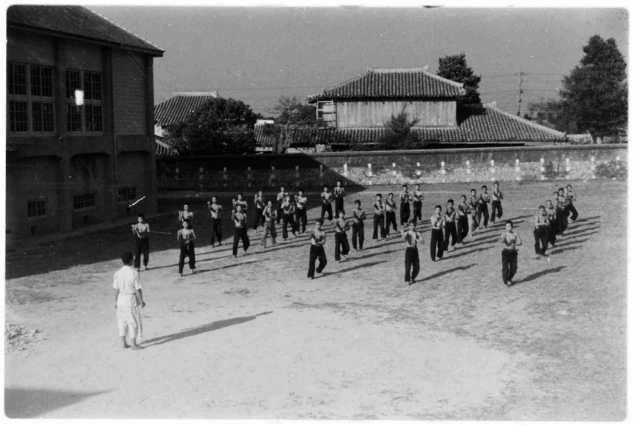
・仲宗根源和『武道極意物語』1938年、東京図書株式会社

・日本民藝協会『月刊民藝』第２巻第３号、1940年

坂本万七撮影の空手関連写真（公益財団法人　日本民藝館　所蔵）

『坂本万七遺作写真集　沖縄・昭和 10 年代』（1982 年）
＜掲載＞

写真Ａ：空手教練

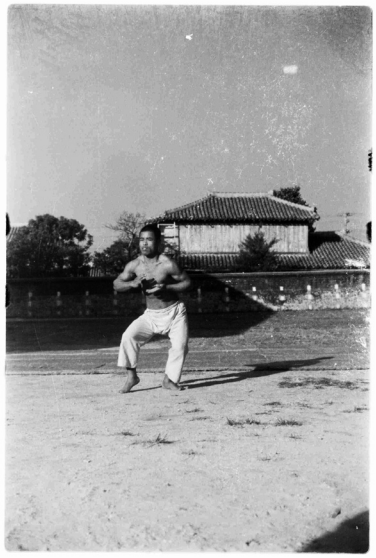


写真Ｂ：撮影を見学する生徒

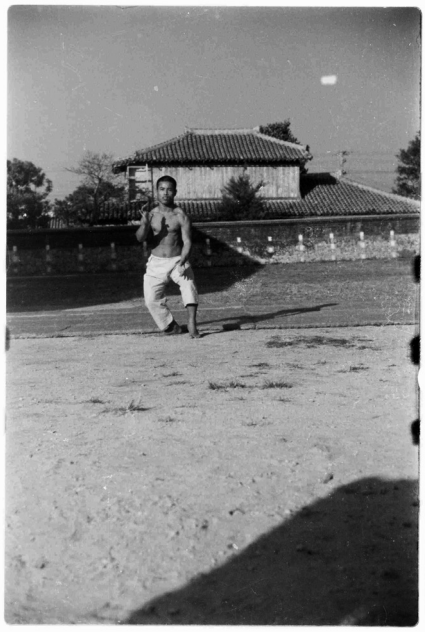
＜未掲載＞

写真Ｃ：映像撮影風景

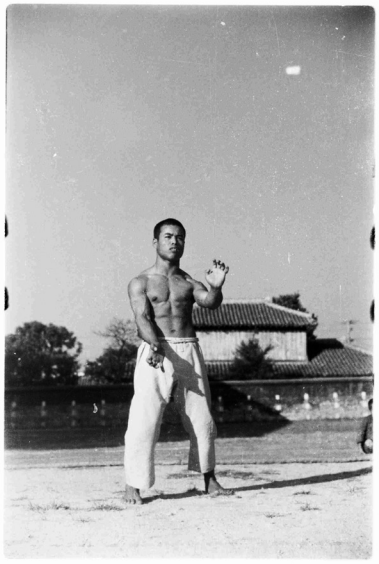
写真Ｄ：クルルンファー①



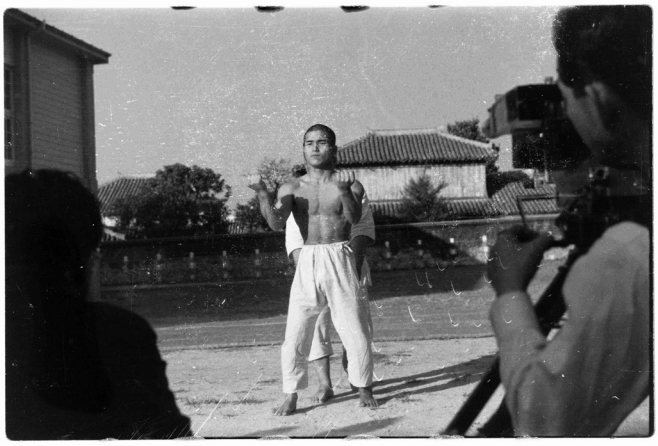
写真Ｅ：クルルンファー②



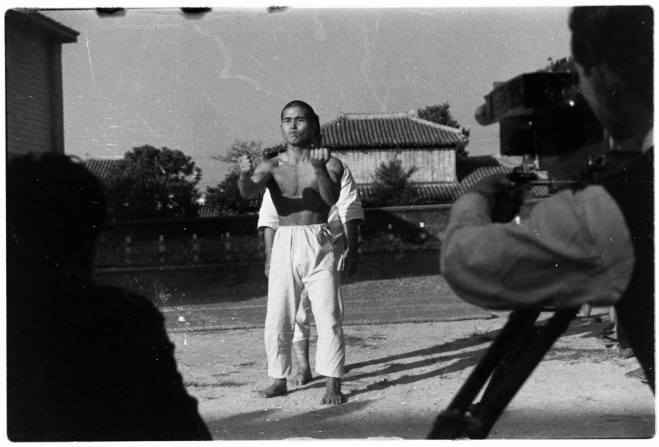
写真Ｆ：テンショウ



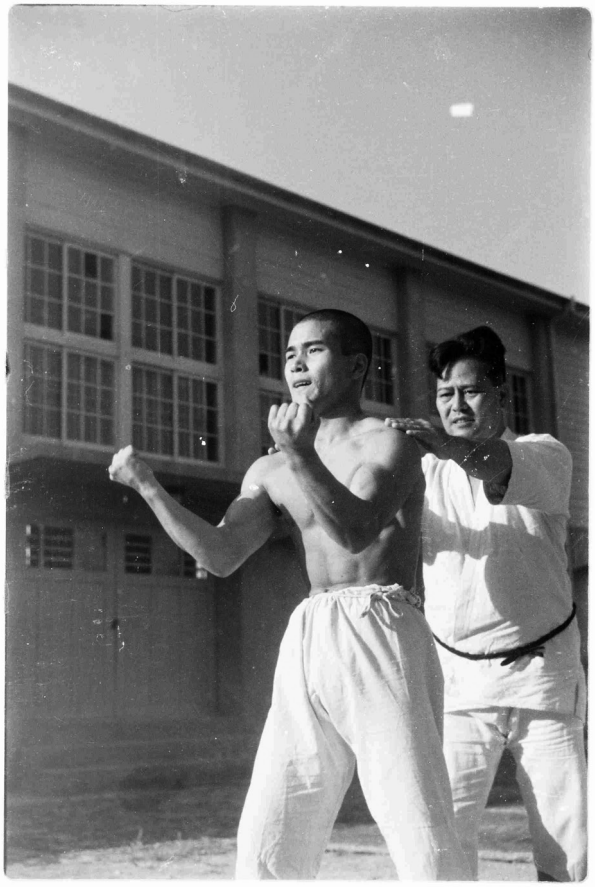
写真Ｇ：サンチン①



写真Ｈ：サンチン②



写真Ｉ：サンチン③



写真Ｊ：タンを用いた鍛錬

写真Ｋ：型の分解

別表：映画「琉球の風物」の台本及び映画本編の解説等一覧（凡例は表の下に記す）

ページ数	テロップ・解説番号	台本記載事項		本編の解説（ナレーション）	映像時間	字幕・映像	映像・表示事項	備考
表紙		原本（カット五カ所） 琉球の風物　全一巻 松竹株式会社	－	－	－	－	－	・台本に所蔵印（紫色）及び貴重書シール有り
見返し		－	－	－	－	－	－	・台本に所蔵印（紫色）及び貴重書シール有り及び「松竹大谷図書館蔵書／№17779／昭和33年２月10日」の蔵書印（朱色、№は青色、年月日の数字は手書き） ・「15年」（昭和15年のことか？）の書き込み有り
中表紙		琉球の風物	－	－	－	－	－	・台本に「寄贈松竹株式会社殿」の寄贈者名印（紫色）有り
中表紙の見返し		梗概 琉球の風物を造型美術の立場から　或いは演劇舞踊の側から紹介し　南国的な市場風景驚異的な唐手術を通して琉球の人々の精神生活を現代的な立場に於て　地文的に史的に説明したものでローカルカラー豊かな伴奏の琉球音楽で人々の生活の深さを示したもの 終り	－	－	－	－	－	・台本に「松竹大谷図書館蔵書」の蔵書印（朱色）有り
1-1	(一) T	上段 提供 日本短篇映画社	下段 －	－	0:01	字幕	＜表示＞ 提供 日本短篇映画社	・(一) の下に「T」とあるのはテロップを示しているのか。
1-1	(二) T	大日本文化映画製作所作品	－	－	0:08	字幕	＜表示＞ 文映 大日本文化映画製作所　作品	・(二) の下に「T」とあるのはテロップを示しているのか。
1-1	(三) T	琉球の風物	Ⓢ（太鼓蛇皮線伴奏）つづく 唄<庵点>月夜（チチユ）や月夜（チチユ） と思て（トゥムティ） ハイチョウ	－	0:17	字幕	＜表示＞ 琉球の風物 A1.743	・下段のⓈはサウンドのことを示しているのか（以後省略）。 ・(三) の下に「T」とあるのはテロップを示しているのか。 ・表示の「A1.743」の「1」は、アルファベットの「I」(ｱｲ)の可能性もある。
1-1	(四) T	企画　日本民藝協会 監修　柳　宗悦 　　式場隆三郎		－	0:26	字幕	＜表示＞ 企画　日本民藝協会 監修　柳　宗悦 　　式場隆三郎	・(四) の下に「T」とあるのはテロップを示しているのか。

ページ数	テロップ・解説番号	台本記載事項		本編の解説（ナレーション）	映像時間	字幕・映像	映像・表示事項	備考
1-1	（五）T	撮影／編輯　猪飼助太郎 録音　東城絹児郎 現像　宮城島文一		－	0:37	字幕	＜表示＞ 撮影／編集　猪飼助太郎 録音　東城絹児郎 現像　宮城島文一	・（五）の下に「T」とあるのはテロップを示しているのか。
1-2	（六）T	音楽　柳　兼子 山内伶晃 民謡採譜　沖縄県立第二高等女学校 字幕　芹沢銈介	明ける（アキル）夜（ユ）や知（シ）らぬ」	－	0:45	字幕	＜表示＞ 音楽　柳　兼子 山内伶晃 民謡採譜　沖縄県立第二高等女学校 字幕　芹沢銈介	・（六）の下に「T」とあるのはテロップを示しているのか。
1-3	1Ⓓ	解説「九州と台湾との間に広い太洋に点々と飛石の如く散在する小さな島の群　琉球」	－	九州と台湾との間**の**広い太洋に点々と飛石の如く散在する小さな島の群　琉球	0:56	地図	＜映像＞ 地図の表示。東京、関西から沖縄へ画面が移動する。	・番号の下に　とあるのは、解説（説明、description）を示しているのか（以後省略）。 ・台本では「間に」と表記しているが、本編の解説で「間の」と発せられている。
1-3	2Ⓓ	解説「**此処は本州最南端の亜熱帯地方**　隆起した珊瑚礁の台地には　蘇鉄や芭蕉や龍舌蘭などの南国特有の植物が繁茂している」	Ⓢ（ハミング つづく）	隆起した珊瑚礁の台地には　蘇鉄や芭蕉や龍舌蘭などの南国特有の植物が繁茂している	1:13	映像	＜映像＞ 海岸、蘇鉄等	
1-3～1-4	3Ⓓ	解説「且つては南支那海から遠く南洋方面にまで乗り出したと云う刳（クリ）舟　顔は住民の心の仕事　信仰の何よりの彫刻である」	－	且つては南支那海から遠く南洋方面にまで乗り出したと云う刳舟　顔は住民の心の仕事　信仰の何よりの彫刻である	1:45	映像	＜映像＞ 蘇鉄から糸満の漁師達	
1-4	4Ⓓ	解説「石を甃きつめた路面　両側に築かれた石垣　**本邦の**最強風地に当る琉球の路は石で舗装され　独特の美しい面影を残している」	－	石を甃きつめた路面　両側に築かれた石垣　最強風地に当る琉球の路は石で舗装され　独特の美しい面影を残している	2:01	映像	＜映像＞ 石畳道、石垣等	・上部に「申請前一字訂正」の押印有り。「一」のみ黒ペンで手書きされている。 ・この訂正は「凡」を「風」に変えた部分を指している。
1-4	5Ⓓ	解説「神秘な歴史を秘めた城跡の静けさ」	－	神秘な歴史を秘めた城跡の静けさ	2:20	映像	＜映像＞ 中城城跡	
1-4	6Ⓓ	解説「琉球の名橋「まだん橋」」	－	琉球の名橋「まだん橋」				
1-5	7Ⓓ	解説「天平の昔を想わせる赤い瓦の建物　古くは海外諸国との交通貿易の接続点であり　**早くより本土の文化と**相互に影響のあった此の島々は　建築や彫刻　音楽　舞踊　工芸等の固有の文化が一千年に亘って栄え　その人文の跡は　今も豊かに伝えられている」	Ⓢ（笛蛇皮線伴奏　つづく） 唄<庵点>常（トゥ）磐（チワ）なる松の（マチヌ） イヤイヤ	天平の昔を想わせる赤い瓦の建物　古くは海外諸国との交通貿易の接続点であり　相互に影響のあった此の島々は　建築や彫刻　音楽　舞踊　工芸等の固有の文化が一千年に亘って栄え　その人文の跡は　今も豊かに伝えられている	2:37	映像	＜映像＞ 真玉橋、天女橋、放生橋	

ページ数	テロップ・解説番号	台本記載事項		本編の解説（ナレーション）	映像時間	字幕・映像	映像・表示事項	備考
1-5 ～ 1-6	8Ⓓ	解説「その昔（かみ）の王府首里城にある守礼門…　城の正門たる歓（サン）会門……　そして琉球王が文武百官を引見し　盛大な式典を挙げた正殿　御殿の一部に残る美しい三層の屋根　何れも形式は地理的に近い支那福州辺の影響を受けて居乍ら　**何処かそこには大和風の感覚が　大和民族と源を同じくする**琉球民族の床しい好みが　強く香りを放っているのである」	(七) Ｔスーパー 首里城正殿 イヤイヤ ワングガヨー 変ること 無いさめ イヤイヤ ワングガヨー (以下繰り返し　つづく) (八) Ｔスーパー 孔子廟 (九) Ｔスーパー 尚家の門	その昔の王府首里城にある守礼門…　城の正門たる歓会門…… 　そして琉球王が文武百官を引見し　盛大な式典を挙げた正殿 　御殿の一部に残る美しい三層の屋根　何れも形式は地理的に近い支那福州辺の影響を受けて居乍ら　琉球民族の床しい好みが　強く香りを放っているのである	3:05	映像	＜映像＞ 龍樋、守礼門、歓会門、淑順門、首里城正殿、南殿、孔子廟、尚家の門、弁財天堂 ＜表示＞ 字幕：首里城正殿 字幕：孔子廟 字幕：尚家の門	・本編の解説（ナレーション）で「歓会門」は、「カンカイモン」と発せられている。
1-7	9Ⓓ	解説「玉陵（たまおどん）は歴代琉球王族の霊を祭った王陵で　今から四百四十年前の造営である 　古色を帯びた壁面と蒼然たる岩石の幽邃な趣きは宛ら幽冥の国が目前に漂うの感を覚える」	(十) Ｔスーパー 玉陵たまおどん	玉陵は歴代**王宮**王族の霊を祭った王陵で　今から四百四十年前の造営である　古色を帯びた壁面と蒼然たる岩石の幽邃な趣きは宛ら幽冥の国が目前に漂うの感を覚える	3:47	映像	＜映像＞ 玉陵 ＜表示＞ 字幕：玉陵　たまおどん	・本編の解説（ナレーション）で「歴代琉球王族」は、「歴代王宮王族」と発せられている。
1-7 ～ 1-10	10Ⓓ	解説「此処を護るかの様に岩上に立つ唐獅子の怪異な姿は　此の聖地に一切の不浄を許さぬ象徴でもあろう　玉御殿（おどん）とは 　魂の住み給う宮殿に他ならない 　そこには死んだ何者も祭られていない　現世の者よりも更に　ありありと活きている　精霊がその明け暮れを送る場所とも言えるのである　洞穴の石門を潜って　苔むす甃石（しきいし）を踏む所に世衰（よおどれ）の英祖陵（えーそりょう）がある　岩山の絶壁をうがって幽玄な境を現出した辺り 　石を美しく用いる琉球の床しさを知る事が出来よう　琉球の墓は驚くべき芸術品である　或るものは家の型を現わし　或るものは亀の甲の型（かたち）を示し　此の素晴らしい墳墓は精霊に対する此の地方の人々のまざまざとした信仰の現れと考えられる　凡ての墳墓はその国の信仰の切実な表現である　琉球の人々は　此の壮大な墓を通じて　先祖の精霊達と魂を触れ合っているのであろうか」	(十一) Ｔスーパー 世衰	此処を護るかの様に岩上に立つ唐獅子の怪異な姿は　此の聖地に一切の不浄を許さぬ象徴でもあろう　玉御殿とは　魂の住み給う宮殿に他ならない　そこには死んだ何者も祭られていない 　現世の者よりも更に　ありありと活きている　精霊がその明け暮れを送る場所とも言えるのである　洞穴の石門を潜って 　苔むす甃石を踏む所に世衰の英祖陵がある　岩山の絶壁をうがって幽玄な境を現出した辺り 　石を美しく用いる琉球の床しさを知る事が出来よう　琉球の墓は驚くべき芸術品である　或るものは家の型を現わし　或るものは亀の甲の型を示す　此の素晴らしい墳墓は精霊に対する此の地方の人々のまざまざとした信仰の現れと考えられる　凡ての墳墓はその国の信仰の切実な表現である　琉球の人々は 　此の壮大な墓を通じて　先祖の精霊達と魂を触れ合っているのであろうか	4:12	映像	＜映像＞ 玉陵から浦添ようどれ ＜表示＞ 字幕：世衰　ようどれ	・台本では「世衰」を「よおどれ」と表記しているが、本編の字幕表示は「ようどれ」となっている。
					4:42	映像	＜映像＞ 墓群（破風墓、亀甲墓）	・上部に「申請前一字加入」の押印有り。「一」のみ黒ペンで手書きされている。 ・この加入は「亀の甲の型を示し」の「し」を加えたことを指している。 ・本編の解説（ナレーション）で「亀の甲の型を示し」が「亀の甲の型を示す」と発せられている。

ページ数	テロップ・解説番号	台本記載事項		本編の解説（ナレーション）	映像時間	字幕・映像	映像・表示事項	備考
		―	Ⓢ（太鼓　蛇皮線伴奏　つづく） Ⓢ（琉球の民謡聞きとりがたし） 唄<庵点>旅（タビ）や浜宿り（ハマヤドゥイ）草（クサヌ）の葉（ファ）ど（ドゥ）枕（マクラ） 寝ても（ニテム）忘ららぬ（ワシララン） 我親（ワヤヌゥスバ）」	―	5:26	映像	＜映像＞ 雑踊り「加那ヨー天川」	
				―	5:50	映像	＜映像＞ 雑踊り「浜千鳥」	
1-10	11Ⓓ	解説「郷土色豊かな琉球の踊りと芝居　琉球こそは唄と踊りの国である」	唄<庵 点>三 月（サンガチ）がなれば（ナリバ）梯梧の花（デイ■ヌハナ）咲きゆり（サチユイ）わにも友（ワニンドシ）とまりて（トゥメティ）つれて遊ば（チリテアシバ） ハシーヤープーシーヤープー」	郷土色豊かな琉球の踊りと芝居　琉球こそは唄と踊りの国である	6:32	映像	＜映像＞ 組踊「女物狂」 （盗人、子ども）	
1-11	12Ⓓ	解説「纏綿たる蛇皮線と歌の調べ　素朴な所作事　それは琉球の永い「くらし」を背負っている　人々の日常の「くらし」に深く根ざしているのである」	―	纏綿たる蛇皮線と歌の調べ　素朴な所作事　それは琉球の永い「くらし」を背負っている　人々の日常の「くらし」に深く根ざしているのである	7:10	映像	＜映像＞ 組踊「二童敵討」 （阿麻和利）	
1-12	13Ⓓ	解説「能衣裳を思わせる絣の着物　琉球に住む人々の素朴な生活‥‥小さい刳舟を操って遠く危険な南支那海迄も出漁する男たち‥‥‥藍の香も高い紺絣を着て男と一緒に働く女たち　此処は女の働く土地だ　彼女たちは魚を買い取ってそれを市場に持ち運ぶ　何れも糸満の女達の活々としたあきない」	―	能衣装を思わせる絣の着物 琉球に住む人々の素朴な生活‥‥小さい刳舟を操って遠く危険な南支那海迄も出漁する男たち‥‥‥藍の香も高い紺絣を着て男と一緒に働く女たち　此処は女の働く土地だ　彼女たちは魚を買い取ってそれを市場に持ち運ぶ　何れも糸満の女達の活々としたあきない	7:33	映像	＜映像＞ 葬式風景、糸満の風景、漁師、女性や子ども達	

ページ数	テロップ・解説番号	台本記載事項		本編の解説（ナレーション）	映像時間	字幕・映像	映像・表示事項	備考
1-13	14Ⓓ	解説「鮮魚（うお）市場　彼女たちは　その逞しい手で庖丁を揮い肉を切り　大声で売値をつける　声高な取引　もみ合い　その生き生きした喧燥の中に如何にも南国的な珍らしい魚が並べられている」	唄<庵 点>エ イエイ　君は百歳わしや九十九迄 俱に白髪がナーはえるまで はえるまで 俱に白髪がナーはえるまで エイエイ神や仏も　護りて給え 今宵限りのナー 我が想い我が想い　今宵限りのナー　我が想い エイエイ上り下りの　坂原越えて　もとの都にナー　早や帰る 早や帰る もとの都にナー 早や帰る エイエイ君は百歳　わしや九十九迄 俱に白髪がナーはえるまで	鮮魚市場　彼女たちは　その逞しい手で庖丁を揮い肉を切り　大声で売値をつける　声高な取引　もみ合い　その生き生きした喧噪の中に如何にも南国的な珍らしい魚が並べられている	8:29	映像	＜映像＞ 魚市	
		解説「此の厚っぽたい豆腐は女達によって作られ　女達によって売られ　琉球の食物の重要な位置を占めている		此の**厚ぼったい**豆腐は女達によって作られ、女達によって売られ　琉球の食物の重要な位置を占めている	8:54	映像	＜映像＞ 豆腐市	・台本では「厚っぽたい豆腐」と記載されているが、本編の解説（ナレーション）では「厚ぼったい豆腐」と発せらている。
1-14	15Ⓓ	本場の琉球絣　芭蕉布　八重山袖　壷　瀬戸物　いろいろの物を並べた市場　商う人　買う人　琉球の市場は女達でうずまる　老いた女も　若い女も　絣の着物に裸足（はだし）の力強い姿で激しい生活の響きを脈打たせる」		本場の琉球絣　芭蕉布　八重山**紬**　壷　瀬戸物　いろいろの物を並べた市場　商う人　買う人　琉球の市場は女達でうずまる　老いた女も　若い女も　絣の着物に裸足の力強い姿で激しい生活の響きを脈打たせる	9:11	映像	＜映像＞ 陶器売り、もやし売り、布市	・台本では「八重山袖」と記載されているが、本編の解説（ナレーション）では「八重山紬」と発せらている。
1-15	―	解説「琉球に発達した独特の武道唐手…　身に寸鉄を帯びずとも一旦事ある時は敢然起って一瞬の中に人を倒すと云う　之はその昔武器を持つ事を許されなかった琉球の人々の　抑え切れぬ魂が生んだ独特の武技である……　腕を　足を　身体を　武器に代えた　その火の出る様な鍛錬ぶりと素朴なそしてウツボツたる覇（ハ）気は**日本古来の武夫（もののふ）の心を保持しているものと言わなければならぬ**」	―	琉球に発達した独特の武道　唐手…　身に寸鉄を帯びずとも一旦事あるときは敢然起って一瞬の中に人を倒すと云う　之はその昔武器を持つ事を許されなかった琉球の人々の　抑え切れぬ魂が生んだ独特の武技である……　腕を　足を　身体を　武器に代えた　その火の出るような鍛錬ぶりと素朴なそしてウツボツたる覇気は	9:50	映像	＜映像＞ 器具を用いた鍛錬（巻藁、タン、サーシ、甕、チーシ） タンを用いた鍛錬 クルルンファー テンショウ	・上部に「申請前一字訂正」の押印有り。「一」のみ黒ペンで手書きされている。 ・この訂正は「に」を「の」に変えた部分を指している。

ページ数	テロップ・解説番号	台本記載事項		本編の解説（ナレーション）	映像時間	字幕・映像	映像・表示事項	備考
1-16	17ⓓ	解説**「此の古格ある武道は　今　体育に生かされて若い学徒の肉体と精神を燃やし続けている　故あるかな　此処に聖戦四年　沖縄県琉球からは幾多の戦士が応召して　大陸の戦野に皇国の武威を示しているのだ」**	－	－	－	－	－	・上部に「申請前二字訂正」の押印有り。「二」のみ黒ペンで手書きされている。 ・この訂正は「身」を「肉」に変えた部分と、「場」を「野」に変えた部分を指している。
1-17	18ⓓ	解説**「本州より遙か南に突き出て　支那或いは諸外国の抵抗を強く受け乍ら然も日本の古格をよく保ち続け来た琉球**　一千年の文化史を秘めて琉球は今も強く素朴に生き抜きつつある」	Ⓢ（ハミングつづく）	一千年の文化史を秘めて　琉球は今も強く素朴に生き抜きつつある	10:28	映像	＜映像＞ テンショウからセイユンチン（セイエンチン）（集団演武）	
		琉球の風物　完 大日本文化映画製作所	－	－	10:58	字幕	＜表示＞ 琉球の風物 完 大日本文化映画製作所	・台本に「松竹大谷図書館蔵書」の蔵書印（朱色）有り

終了 11:03

凡例

※台本記載事項及び解説（ナレーション）の文言は、現代仮名遣いに置き換えて表記している。
※台本記載事項の内、台本で削除されている文言は、ゴシック体と太字、下線で示した。
※解説（ナレーション）の内、台本記載事項と異なっている部分は、ゴシック体と太字、下線で示した。
※解説（ナレーション）は、映画本編の音声を聴いた上で、台本の文言に合わせて表記した。
※台本記載事項の文言の後ろにあるカッコ内の文字は、よみがなとして表記されていたものである。
※台本の下段の「唄」の始めに庵点の歌記号が記されているが、本表では該当カ所に＜庵点＞と入れている。
※映像時間は、沖縄県立博物館・美術館に保管されている映画「琉球の風物」（４K）に基づいている。
※映像・表示事項の＜映像＞の名称等は筆者が便宜的につけた。＜表示＞は基本、映画本編に反映されている文字を入れた。